The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	台湾における家族写真の文化史
Author(s)	林, 曉淳
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55684
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　林　曉淳　）	
論文題名	台湾における家族写真の文化史

論文内容の要旨

本研究では、台湾の家族写真・家庭アルバムを分析対象として取り上げ、多面的な考察を進め、そこから読み取れる歴史的、民俗的事象を解析した。それを踏まえ、家庭アルバムから浮かび上がる、台湾の人々が抱いている「家」に対する心性、およびそれにまつわる「記憶」の機能、社会的機能の変遷プロセスを明らかにした。分析にあたり、複数の家庭アルバムと結婚写真アルバムを資料として表象分析を行い、さらにアルバムの所有者に対する聞き取り調査を通して、その語りと記憶のコミュニティーから、アルバムに保存された写真の内包した文化的ないし歴史的意味合いを解明した。

第1章では、台湾の写真史の一端として、家庭アルバムに収められた写真の製作側として、重要な存在となった日本植民地時代の写真館の実態を探った。分析データとして、1898年に創刊し台湾での最大の新聞といわれる『台湾日日新報』に載せられた記事をもとにした。その考察から分かるように、台湾における写真館の活動は、1910年代すでに活発になっており、日本人オーナーを中心に新しい背景セットや機材を輸入し、修正技術をはじめに腕も競い合っていた当時の写真館活動の一端が明らかになった。それに続いて、1920年代以降、写真撮影を職にする台湾人の増加も、1930年代写真館の繁盛につながっている。歴史主義時代の家庭アルバムに収められた写真の製作側として、写真館の出現と導入は、台湾の写真史において極めて重要な出来事であり、写真撮影の受容に大きな助力を提供した。

第2章では、幾つかの事例を取り上げて、実例の分析と聞き取り調査により、台湾における家庭アルバムと繋がる感情と歴史の記憶、およびその再生もしくは再構成と保存について考察した。第2章で取りあげたアルバムの所有者は、それぞれの方法で家庭アルバム作りに取組んだ。アルバム作りを通し、自分が参加していない家族の過去もあらためて一つの家族単位にまとめ、新たな絆を作り出した。そして、そこから引き出される語りも含めて、記憶のコミュニケーションを活性化する機能も有している。写真という素材を通して、写真とそれにまつわる思い出の所有者は、人と語り合うことにより、自己の記憶を甦らせるのである。また、家庭アルバムは、私的な家族の「生」の記録であると同時に、人が絶えず時代の流れの中で社会に関わりながら生きてゆくため、公的な歴史の「生」の記録でもありうる。これについて、本章の事例分析からも検証された。

第3章では、台湾の家族写真の原点である先祖の肖像画と関連させながら、複数の家庭アルバムを分析し、そこに見られる共通的な特徴と、その含まれた文化的意味合いが明らかになった。はじめに、大きな特徴として挙げられるのが長者の誕辰 、結婚記念、親の模範受賞など、尊長をメインとしたシチュエーションが多く見られることである。そこからは、長者への孝養の概念を中心とした、晴れのイベントを好む台湾社会の実態が見える。そのようなイベントで撮影された影像は、家庭アルバムにおいて、記録という写真の有する最もスタンダードな機能以上に、家の繁栄と円満に繋がる“福”の 図像として見なされ、“福”を表象する機能が求められる。また、血縁重視と子孫繁栄の概念に基づいたアルバム構成もその特徴の一つである。家庭アルバムは記憶を補完し、感情と絆を強化する機能がある一方、次の世代に広げていく意思も窺える。例えば、本章の分析対象の一つであるKさんのアルバムにある子供を中心とした11ページは、そのようなプロセスをはっきりと示し、一つの家庭アルバムにまた小さな家庭アルバムが内包されているようになっている。このように、台湾の家庭アルバムは、常に一つの大きな家から小さな家に分岐していく様子を描いて、複数の家族物語を語っている様相が見える。それは台湾における血縁家族を中心とする子孫繁栄を求める思想に基づくものであり、族譜に似た無限な広がりを可能とする家族物語の形でもある。

第2章と第3章での実例分析から、時間軸が現在に近づけば近づくほど結婚写真と子供の写真が増えていくことが明らかになった。とりわけ、結婚写真は1980年代から婚紗照という新型結婚写真撮影が現れ、量の急激の膨大化により、家庭アルバムから分割され、独立した個体(アルバム)へとなる変化が目立った。こうした現状を踏まえ、第4章と第5

章では、結婚写真に焦点を置き、それをフォーマルな結婚写真とインフォーマルな結婚写真とに分けて分析した。

第4章では、フォーマルな結婚写真、いわゆる新型結婚写真に焦点を当て、台湾の結婚写真における表象の変遷をたどり、時間の経過とともに変容していく形態や社会的機能を考察した。以前の結婚写真は当事者（結婚する二人）よりも、彼らの親族のために撮られるもの、つまり血縁的共同体のためのものであった。しかし、現在の結婚写真は、当事者である個人の主体性が反映されたものとなっている傾向がある。フォーマルな結婚写真の表象分析を通じて、結婚写真の社会的機能や時代ごとの機能の変化が明らかになった。そこから分かるように、「人生の節目を記念すること」は、結婚写真の最も基本的な機能であり、新型結婚写真になっても、この本来の役割は変わっていない。しかし、「新郎新婦の象徴」や、「新加入者の紹介」という機能は、新型結婚写真を元に作られた額装写真やお礼カードといったグッズを利用して新たに付与されたものである。

第5章では、台湾の結婚儀礼中に撮影されたインフォーマルな結婚写真を分析対象とした。人々が写真としておさえた場面およびそれらを見る視点の分析を行い、台湾の結婚儀礼における民俗の存続と変容について、結婚写真を通して、それを浮き彫りにした。また、保存された結婚写真アルバムに見られる「記憶のコミュニティー」の機能について考えてみた。台湾のインフォーマルな結婚写真を収めたアルバムでは、伝統的な儀礼とともに、第3章で見た家庭アルバムに内包された長者崇敬や子孫繁栄などの概念を感じさせるような場面が見て取れる。そのような場面は、複数の所有者のものを通し、確認することができ、無意識にそう撮ったのだろうが、台湾における結婚という通過儀礼が「家」をまつわる思想と切り離しがたい一面をみせている。これは、台湾では現在においても、伝統的な結婚儀礼が存続している大きな理由の一つであろう。

第4章と第5章の考察結果から、台湾においては、激しい変化を遂げたフォーマルな結婚写真、すなわち新型結婚写真、および不変な部分を見せるインフォーマルな結婚写真、この両者は人々が結婚儀礼をとりまく、しきたり脱却の希望としきたり継続の願いをバランスよく取り、両立させている。近年、結婚式自体のしきたりに厳しい家においても、新型結婚写真の撮影だけは干渉せずに、新郎新婦の二人に任せるのがほとんどであり、台湾の結婚写真は、「家」と「個人」を巧妙に併存させている存在となる。

台湾において写真・撮影行為については、さまざまな視点からの研究が行われてきた。そのなかでは家族写真について言及しているものは少なからずあるが、家族写真や家庭アルバム自体を研究対象にするものはいまだに少ないのが現状である。これまで“点”として断片的に個々に取り上げられたものを、歴史の流れに沿って、複数の“線”として繋げ合わせ、家庭アルバムそのものにアプローチしたのが本研究の特徴である。

そこから導き出した結論として、家庭アルバムの歴史的変遷とともに、台湾社会における「家」のハレと和を追求する傾向、孝養の精神を重んじる習慣、そして異文化や新しいものに対する受容力が明らかになった。家庭アルバムまたはそこから派生した結婚写真アルバムの社会的機能の究明、および家庭アルバムという素材を通して、「家」を見る同時に、その根底にある民族心性をイメージの視点から提示したことに本研究の意義があると思う。

また、近年台湾では各地で“古写真と語り”を集めて、それらの展示と出版を通して、地方の歴史と特色を浮き彫りにする活動が盛んになっている。地方の歴史と特色への追求、いわば自分が生きてきた土地の歴史への知の欲望と自分探しの動きが台湾各地で起き、台湾の人々が台湾という地を知ろうとして、台湾らしさを探している。その台湾らしさ探しには、家庭アルバムは恰好な素材であり、本研究が微力ながら、些細な力添えになれればと思う。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　林　曉淳　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　大阪大学　教授	川村邦光
	副 査　大阪大学　教授	杉原　達
	副 査　大阪大学　准教授	北村　毅

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：台湾における家族写真の文化史

学位申請者　林 曉淳

論文審査担当者
主査 大阪大学教授　川村邦光
副査 大阪大学教授　杉原　達
副査 大阪大学准教授　北村　毅

【論文内容の要旨】

本論文では、台湾の家族写真・家庭アルバムを対象として取り上げ、その歴史的・民俗的事象を分析するとともに、家庭アルバムから浮かび上がる、台湾の人々の抱いている家に対する心性、および家や家族にまつわる記憶、その社会的機能の変遷プロセスを考察する。その際には、複数の家庭アルバムと結婚写真アルバムを資料として表象分析を行ない、さらにアルバムの所有者に対する聞き取り調査を通して、その語りと記憶を考察することによって、家庭アルバムに保存された写真のもつ文化史的な意義を解明することを目指している。

序論では、台湾における家族写真・家庭アルバムに関する数少ない先行研究を検討し、本研究の位置づけと研究方法・課題を設定する。第 1 章では、台湾の写真史、写真館の設立・写真師の育成のプロセスをたどり、1898 年に創刊された『台湾日日新報』の広告から、日本植民地時代の写真館の実態を探る。台湾において、撮影活動が本格化しはじめたのは日本植民地時代からであり、1920 年代以降、写真撮影を職業にする台湾人が増加し、1930 年代に写真館が繁盛して、家族写真が撮影されていったことを明らかにしている。台湾の写真史の展開を踏まえ、第 2 章では、台湾の家庭アルバムを事例として取り上げて、実例の分析と聞き取り調査により、家庭アルバムの作製においては、家や家族に対する親密な感情や歴史の記憶が再生もしくは再構成されていることを考察した。

次いで、第 3 章では、台湾の家族写真の原点である先祖の肖像画と関連させながら、複数の家庭アルバムを比較しながら分析し、家族の集合写真から次第に結婚写真と子供の写真が増えていき、1980 年代からは「婚紗照」という新型結婚写真撮影が現われ、急激に量が膨大化して、家庭アルバムから結婚写真が分離され、独立した結婚写真アルバムが作製されていくという特徴を明らかにしている。

こうした現状を踏まえ、第 4 章と第 5 章では、結婚写真をフォーマルな結婚写真とインフォーマルな結婚写真とに分けて分析する。第 4 章では、フォーマルな結婚写真、いわゆる新型結婚写真に焦点を合わせて、台湾の結婚写真における表象の変遷をたど

り、時間の経過とともに変容していく形態や社会的機能を明らかにする。第5章では、結婚儀礼の最中に撮影されたインフォーマルな結婚写真を分析対象としている。写真として撮影した場面、また結婚式をとりまく人々の視線を分析して、台湾の結婚儀礼における民俗の存続と変容について考察している。そして、結婚写真アルバムを作製して保存していくなかで、当事者や家族メンバーの間で「記憶のコミュニティー」が生成されていることを明らかにしている。終章では、これまで述べてきた家族写真・家庭アルバムの歴史的・文化的な展開をまとめて、本研究の意義および今後の課題と展望を述べて締め括っている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、これまであまり行なわれてこなかった台湾の家族写真・家庭アルバム研究を大きく飛躍させている。特に、数多くの家族写真・家庭アルバムの所蔵者のもとを訪ねて、それを借りたりコピーしたりして、資料として収集するとともに、その所蔵者に対して聞き取り調査をすることによって、家族写真・家庭アルバムの歴史的・文化的な展開プロセスを跡づけて分析したところが、本論文の大きな特徴であるといえる。以下、本論文で評価できる点について記していこう。

第一に、植民地時代の写真を分析して、祭祀・礼拝の対象になっている先祖肖像画を台湾での写真の原点として位置づけ、椅子や机、縁起物の配置に見られる座り方から構図まで、先祖肖像画の影響を受けた高齢者の写真が撮影され、先祖肖像画と同じく祭祀・礼拝の対象になっていたことを図版資料を用いて明らかにしている。第二に、家族写真を家庭アルバムへと整理・編成する過程を聞き取り調査に基づいて分析し、表象分析から集合的記憶論へと論点を展開していることは、写真研究を一層進展させたということができる。家族写真の家庭アルバムへの保存・整理、そして再編成は過去の記憶・感情を甦らせ、また結婚写真も含めた家庭アルバムを他の人と見て語り合うことを通じて、相互に記憶やコミュニケーションを活性化させ、記憶や思い出を他者と分かち合うことができ、記憶のコミュニティーが生成されるとする指摘はすぐれている。第三に、家庭アルバムから独立して結婚写真アルバムが作製されていくという指摘は興味深いものである。また結婚写真を旧型結婚写真と新型結婚写真に分けて、両者の表象の相違を分析するとともに、社会的な機能の相違、そして民俗的な結婚儀礼の変化も分析して、結婚写真の変容をすぐれて鮮やかに浮き彫りにして、そこから民族的心性の持続と変容を明らかにしていったことは評価できる考察だといえよう。

本論文では、何よりも収集した数多くの写真を資料として掲載することによって、課題を実証的・歴史的に検証したところは、文化史研究としてすぐれた成果である。先に記したように、家庭アルバム・結婚写真アルバムを通じた「記憶のコミュニティー」の生成に関する指摘は評価できるが、さらに掘り下げて分析する必要がある。アルバムの再編成の際には、記憶自体を再構成して、自分の物語をあらためて再構築することも大いにあるからである。また、アルバム所蔵者の階層に関する分析にも留意する必要がある。だが、こうした残された課題はもとより本論文の意義を損なうものではなく、今後の研究を深化させていくうえでの課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。